

この内容はすべてフィクションです。現実には一切存在しません。

これから話すことは、短い人生経験で、誰かと出会い、営み、別れた経験の積み重ね。どこにでもいる平凡な人間同士のつながり、恋と欲の表現。

1. 出合い

異性のクラスメイト。それがA。

たまたま音楽の好みがあって会話が弾み、自然と連絡を取り合うようになった。

私には学業との両立なんて真面目さはなく、どんどんやり取りに夢中になり、気がつけば深夜2時を超えることも。

年頃の高校生なんて、頭の中は色んなことに興味津々だ。深夜には好奇心に任せて性的なことを聞いたり聞かれたりする。そんな内容だってフラットに付き合ってくれる人。

季節は夏。二人で映画に行くことに。いわばデートの約束。勉強も部活も生徒会もそっこのけ、ふわふわしたまま週末が近づく。その日は寝不足の頭を全力で使って、できるだけおしゃれをして家を出る。遅刻するくらいなら、と早めに出発したので、約束の時間まではまだ30分もある。普段ならゲームでもして暇をつぶすところだが、どうしようもなく気になって辺りを見渡していると、見慣れた顔と新鮮な服装のA。正直、裏切られた。良い意味で。平凡な服装の私には思いもつかないくらい、暖色の古着を

着こなした姿は、よく見る制服姿とは全然違って、心がグッと惹かれて行くのがわかる、そんな感じ。

映画は記憶に残らないくらいのありきたりな内容で、でも映画館特有の暗がり、なんとも言えない距離が、二人にはとても心地良かった。Aと離れたくなくて、なんとなく立ち寄った公園で、実のない会話でも良いから少しでも長く居たい、と思っていたときにまさかの一言。

「好きです。付き合ってください。」

そうして、私とAは恋人になった。